

巻頭
言

銀座探訪

| 会長 山崎 學



慶應好きな母は息子を慶應に入れたかった。おかげで小学3年から、夏休みになると群馬の辺境にある法師温泉に3週間家庭教師と二人で強制合宿を強いられた。100点以下は点数ではないといわれて成績表を隠すと土蔵に夕食まで閉じ込められた。だんだんと土蔵慣れし梁にひもをかけてブランコ遊びをしていたら血相を変えた母が入ってきて土蔵入りはなくなった。今だったらまさに虐待のような生活を強いられ、おかげで強迫傾向の強い子どもに育った。慶應普通部・中等部入学を目指して目黒にあった慶應受験予備校に3ヵ月に一度高崎から一人で模擬試験を受けに行くのが息抜きになった。当時、高崎-上野間は鈍行で2時間半かかり、上野駅から目黒に行き、権之助坂を下って大鳥神社を左に曲がったところに予備校があった。一度列車が大雪に降り込められて途中で運転中止になり、列車から線路伝いに田端駅まで歩いたのも今となっては懐かしい。試験を終えて銀座松坂屋の食堂で遅めの昼食を食べるのがご褒美だった。戦後の混乱から復興していたとはいえ米は米穀通帳による配給制で、松坂屋の食堂では米穀券とエビフライにハンバーグが付いたミックスランチという2枚の食券を買わなければ昼食にありつけなかった。有楽町で下車して銀座方面に歩いていくと「君の名は」で有名になった数寄屋橋があり、下をのぞくと汚いドブ川が流れていた。両校とも学科試験には合格したが身体検査で「肋膜に影」があったことで中学入学は果たせず、高校で医学部推薦を目指したが、麻雀にハマって面子全員が医学部推薦を逃して工学部行きになり、推薦を辞退して日本大学医学部に入った。

大学生になってからも銀座松坂屋特選食堂のヒレカツ、「月ヶ瀬」のカニクリームコロッケ、「スイス」のスープ付きのカツカレー、「鳥ぎん」の釜めしが楽しみだった。本格的なフレンチとの出会いは高校生の時に叔父夫婦に連れて行ってもらった銀座「花の木」で志度シェフの料理に出会ったことである。今でも大好きなコンソメスープと白いヴィシソワーズを合わせた「パリ・ソワール」との出会いは衝撃的だった。明治34（1901）年香川県出身の志度藤雄は小学校卒業後すぐに神戸の洋食屋で働き始める。大正10（1921）年、20歳の時に京都萬葉軒で修業し、欧州航路客船「香取丸」に船員として乗り込み、ロンドンで脱走して不法入国で逮捕され強制帰国させられるが、マルセイユで再び抜け出し、パリに脱出して「ホテル・ムーリス」で修業し、第二次世界大戦勃発前に帰国して銀座で「日動グリル」を開店するが、戦火が拡大し閉店して満州に渡った。終戦後満州から帰国して昭和25（1950）年10月に吉田茂、麻生太賀吉、石橋正二郎の尽力で銀座に「花の木」を開店する。花の木時代に川瀬勝博（クレセント）、原敏雄（ク

レル・ド・赤坂), 扇谷正太郎 (エヴァンタイユ), 高橋徳男 (レンガ屋, アピシウス) といったその後のフランス料理を代表するシェフを育てている (重金敦之著 料理王国 155号抜粋)。

TBS 会館地下の「レストラン・シド」に移った志度シェフを追いかけていたが, 昭和 41 (1966) 年に数寄屋橋交差点のソニービル地下に開店した「マキシム・ド・パリ」ができるまでパリ直輸入のフランス料理に魅了されることになる。節操がないのは今も昔も変わらない。マキシム・ド・パリは地下 1 階にウェイティングバー, 地下 2 階にアールヌーボー調の鏡張りの壁に囲まれた今まで体験したことがない空間があった。やがて特別な日に自分の財布で行けるようになり, マキシムで初めて舌平目のプレゼ, リドヴォー煮込みを体験した。しかしマキシムがはとバスコースに入り, 雰囲気が悪くなったのをきっかけに渋谷松濤の「シェ・松尾」に通い始めたが, ディスコ仲間に誘われてフランス料理からイタリア料理に浮気して麻布「キャンティ」, 霞町「フィガロ」, 代官山「ラ・アリア」, 九段上「ラ・コロンバ」, 六本木「エスト」, 淡島「ドマーニ」, 南平台「マダム・トキ」に入り浸った。

銀座の泰明小学校前の路地を入ったビルの地下にある「美弥」を知ったのもこの頃である。ここで新宿紀伊国屋創業者の田辺茂一, 噺家の立川談志, 毒蝮三太夫, ポール牧, 俳優の中尾彬, 日劇のダンサーだったアンジェラ浅丘といった人たちと知り合った。田辺茂一社長が古い革靴をもって銀座に出勤する支度をしながらマツハ文朱, 木原光智子, 宝塚劇場の新人たちに店屋物をとって食べさせてニコニコ笑っている情景によく出くわした。銀座で最古参のバー「セレナーデ」の野中花ママは 80 歳という高齢にもかかわらず娘と二人で山手線の振動が伝わる線路下で 300 円均一のバーを営んでおり, 病院経営管理委員会が終わると西島英利先生, 千葉潜先生と連れ立って出かけた。何の変哲もない白壁に数々の常連客が書いた文化財級の短編詩, 音符の落書きは線路下の再開発事業で取り壊されてしまった。美弥のマスター春さんが出してくれたハゼのカラスミとキュウリの辛味噌つけの味はいまでも舌が覚えている。1 階の「東生園」から取る餃子, 焼きそばを食べながら鮫島健先生, 西島先生, 千葉先生を交えて談志と与太話をしたのも楽しい時間だった。肝臓病を患っていた春さんが闘病に疲れて平成 28 (2016) 年 12 月に 52 年の歴史に幕を閉じたのが残念である。